
SEED GEASS

魔蘿姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SEED GEASS

【著者名】

NIGHT

【作者名】

魔羅姫

【あらすじ】

コードギアスの世界にキラとラクスが入り、世界との信じる信念をぶつけあい戦争根絶に生きる。尚、お気付きの点がございましたら是非、評価のところまで伝えて貰えれば、ありがとうございます。

第一話 夢の中の天使と女神（前書き）

種キャラの略

第一話 夢の中の天使と女神

思考の小波おこなみの中、ぼんやりとした意識でキラ・ヤマトは田を覚ました。

真っ白な空間が広がりそこへポツンと立っている。

キラは見たこともない景色に戸惑いを込め、呟く。

「……夢？」

ギルバート・デュランダルとの決戦を終え、デュランダル派の国をラクス・クライン、カガリ・コラ・アスハ、アスラン・ザラと共に回り、和平に専している最中である。

とは言つもののラクスらが赴く必要が無いほど沈静化されつつあるのは余談である。

キラは感触を確かめるように床を触る。キラが触れた瞬間、床に水を弾いたかのような波紋が広がった。その波紋は広がり続け、景色を一変させた。

キラは不思議な感触と景色の豹変に困惑をあらわにする。

美しいまでに広がる、エメラルドグリーン。

広大な草原への変化。

キラの思考が着いてこれるはずも無く、呆然と草原を眺める。

そんなキラに聞き慣れた優しいがかけられる。

「キラ」

「ラ…ラクス…?」

キラが振り返るといつも隣にいた少女、いや最早、女性と呼ぶべき聰明で温かな存在がいた。

ラクスはいつもと変わらず、温かな笑みをキラに向ける。

ラクスがキラに近付くと悲しげに胸に顔をうずめた。キラは驚いたが微かに震えるラクスの肩を見て、優しく抱き締めた。

しばらくしてラクスが胸から顔を離すとキラはラクスに問いかける。

「ラクスどうしたの?」

「……わたくしはキラが此処へ訪れるまで、此処へ沈む記憶を見ました…」

「記憶…?」

キラが聞くとラクスは近くに建つてゐる小さな石柱に手をかざす。かざすと同時に空を埋め尽すほどの哀しき世界が現れた。

子供が泣き続ける

人々は逃げ惑う

人々は立ち向かう

人々は虐げられる

勝者は人々を省ない

戦争の歴史が永遠に回想され続ける草原。

それは嫌になるほど、静かだった。

キラはかざし続けるラクスの手を壊れ物を扱うかのように優しく外した。

映像が消えても草原は静かだった。

しばらく間を置いて、ラクスはキラに決意の眼差しを送る。

「この先に二つの扉がありました。きっと」「行こう。ラクス、君が思う方へ」

ラクスは察してくれたキラに感謝しながら二つの扉の前に立つた。

右の扉には 平和
左の扉には 混沌

と書かれ、開けられる時を待っていた。

ラクスは迷うそぶりを見せず、混沌の扉のドアノブに手をかけ、止まつた。

「キラ、わたくしは此所が夢であつても、現実であつても、きっと必要とされたから此所にいるのだと思います。ですから……」

「僕は君と歩む、どんな場所でも、どんな時でも

「……ありがとうございます。キラ」

ラクスが扉を開くと同時に光に一人は包まれた。

無重力感が体を支配する中、キラとラクスは手を取り合つた。

地面の感覚が戻る。

喧騒の音とビル建造物が広がつた。

キラとラクスは街の真ん中に立つていた。

「……？」

「キラ、あちらを

キラはラクスの手を握つたまま、周りを見渡す。ラクスは未だ繋いだ手に安心感を覚えながら、気付いた一つの液晶パネルを指差した。

液晶パネルに映る白髪の男、シャルル・ジ・ブリタニアは高らかに宣言した。

『戦い、争い、その先にこそ真に強大な国家の礎は築かれる！ 支配されるな。支配せよ！』

白髪の男はとてつもない威厳を発しながら、手を天へと突き出した。

『勝利は最早、我、眼前にある。オールハイル・ブリタニア！！』 シャルルの声に呼応するように周りの兵士も声を張り上げる。

「ラクス、これは……」

「ええ、キラ。此処はわたくしたちが知らない世界のようです」

ラクスはキラに確信した声で告げた。

第一話 天使と魔女

キラとラクスは見上げていたパネルから視線を外すが、やつと自分達の異変に気付いた。

二人の身長が並んでいた。

いや、それだけではない。一人の姿は、まるで十歳程にしか見えない。

「ラクス」

「キラ」

キラは驚愕したがラクスはキラの姿に頬を緩めた。

「キラ、可愛らしいですわ」

「ラクス……」

キラは相変わらずのラクスに肩を落としたが、同時にいつもと変わらないラクスに安心した。

「でも困ったね。これじゃあ、どこにも雇つて貰えないよ」

「キラ、ポケットにIDカードの様なものが……」

ラクスが言つた通り、ポケットにはIDカードが入つっていた。カ一

ドには、キラたちの名前が銘記されていた。

しかし、カードを持っていたとしても体は十歳のキラたちには世間は厳しい気がした。

どうしたものか。と考えていると道路を軍の車が通っていく。

キラはひらめくとラクスに少し悲しげに告げる。

「ラクス、僕は軍に入ろうと思つんだ」

「ですが、キラ……」

ラクスは軍に入ることで世界の情勢等を知ることができるものなど、合理的であると分かつていて。しかし、愛する人を死地においやり、傷付けるのが恐かった。

しかし、口をつぐんだラクスにキラは優しく笑顔で抱きしめた。

ラクスはキラを抱きしめ返した。

ペンドラゴン、ブリタニア帝国軍基地にキラとラクスは訪れた。

彼らの姿は明らかに浮いていた。

試験官は困惑の表情で少年を見ていた。

突然、現れ軍に入団したいと言った少年に何度も、大笑いしたものかIDカードを見ても十歳そこそこのである。

しかし、彼の眼は今までの入団者と違っていた。瞳にとてつもない力を感じたのだ。

試験官は、ほんの、本当にほんの少しの「冗談」で彼に入団試験を受けさせた。シャルル・ジ・ブリタニアの方針上、軍への入団は比較的に受付は簡単になっていた。重点的実力主義、この試験官もこの制度には賛成していた。

それ故にキラは助かったと言つていい。

本来なら相手にもされず終わっていたかも知れないのだから。

試験官は驚愕に目を瞬かせた。

初めはキラも本来の体と今の体のギャップに苦しんだが、さすがはスーパー コーディネイターと言つべきか、凄まじい運動能力を見せ、初めは当たらなかつた射撃は後半は中心にしか当たらないという、はなれ技まで披露した。他の試験も試験官が驚愕している中、難無くクリアしていき、最終的にはオール特A評価。もちろん、年齢的にはアウトである。

しかし、誰の手にも逸材であるのは確かであった。

試験官は少年と少年が連れてきた少女を前にして難しい顔をしていた。

「君は確かに逸材だつた。更に人格面、精神面共に適性だ。しかし、入団するにはやはり早い氣がする。軍は命を取り合つといふだ。そこに年齢は関係はない。だからこそ、もう一度……」

「ありがとうございます。でも、僕は今できる限りをやりたいんです」

少年らしからぬ、眼力で試験官を見つめ返した少年に試験官は一度溜め息をつき、少年の頭を乱暴に撫でサインを書いた書類を渡し、キラとラクスに笑いかけた。

「負けんなよ！坊主。お嬢ちゃん、コイツはいいオトコになるぜー！」

「はーー！」

ラクスも笑顔で返した。

キラは本部へ書類を渡し、一時的に寮へ入ることとなつた。
兄妹に勘違いされたのか、ラクスも同じ部屋に住ませて貰えた。

十歳が軍の試験に合格したことは、その日の内に広まつたのをキラとラクスは知らない。

翌日、キラは新人として軍の訓練に混ざっていた。他人からの好奇の目を既にキラは気にしなくなつていた。

午後から、自在戦闘走行機ナイトメアフレームの演習となつていた。
キラは運が良いと他の皆が言つた。

なぜならナイトメアフレームは今では試作段階から実戦配備段階まで進み、次に予想される日本との戦闘で投入されると言われている程の最新鋭機である。

キラはそれを入団初日に触ることが出来たのだから羨ましがられるのは当然であった。

マニュアルを読んだキラはガンダムとは少し違つた操作方を頭に入れながらナイトメアに機乗する。

システムを起動させ、キラはシステムをチェックしていく。知らな

い間にキラの手は〇〇を書き換えていく。

キラは教官からの応答があるまでいじり続けた。後にこれがもとである人物と知り合いとなることは知るよしも無かつた。

教官の指令通りに並ぶ、グラスゴー。ぶこつな機械人形はランドスピナーがなければ的にしかなりえないほど愚鈍だ。

並ぶことにもそれは影響し、ゆつたりとした動きで並んでいく。

しかし、キラのグラスゴーだけは滑らかに並んだ。教官が気付かなかつたのは幸運だつただろう。

教官から全員に通信が入る。

『今日はお前たちに実戦的練習をしてもらひたためにコーネリア皇女殿下に来ていただいている』

「コ、コーネリア様だつて。どうしよう私、緊張してきちゃつたよ」

「わ、私も」

『言つておぐがコーネリア皇女殿下は本氣でこられる。少しは相手になるよう尽力せよ。』

『イーストマイローデー』

全員の声が響くと同時に演習場にグラスゴーが一体入つてくる。

他と組部は違うグラスゴーそれこそコーネリアの専用機である証で

あつた。

『知つての通りだ。まあ尋常に來い！』

「は、はい」

高圧的な女性の威厳に慌てた初めの右のグラスゴーは構えたコーネリアのグラスゴーに突っ込んでいく。

『愚か者が！』

怒声とスラッシュュハーケンを発射され避けきれず頭部のメインカメラと右足を吹き飛ばされ崩れ落ちた。

そして、左隅に並んでいたキラの順番へ回つてくるまで、誰一人コーネリアのグラスゴーに触ることも傷付ける事もできず、戦闘不能へと追いかまれていた。

『貴様で最後か。まったく今年は不作だな！』

コーネリアのこのセリフは後で誤りであつたと知る。

初めて攻めに徹したコーネリアは近づくとスラッシュュハーケンでいつものようにランドスピナーとメインカメラを狙う、がコーネリアのスラッシュュハーケンをキラは自分のスラッシュュハーケンで弾く。それと同時に安全性を考慮したマシンガンでコーネリアの腕を狙うが避けられる。

コーネリアはグラスゴーの中で感嘆の声を溢した。

『ほお、ハーケンの軌道を読んだか。なりばー。』

「ぐつー！（体の反応速度に機体が着いてこないー。）

自分の思つ通りに動かないグラスバーに悪戦苦闘しながら、ゴーネリアが繰り出すスタントンファームを避けた。ギリギリをみきるキラにゴーネリアは狂喜の笑みを浮かべる。

『貴様、名をなんといつ』

「え？……キラ・ヤマトです」

『キラ……か。覚えておいで』

再びスタントンファームを振るい、キラを攻めよつとするゴーネリアにキラもスタントンファームで応戦する。

スタントンファーム士が、ぶつかリスパークを起こしながら何度も両方の機体をかする。

試合はエナジー切れをゴーネリアの機体が起こし、終了した。

キラは他の軍人たちに撫でられ讃められた。

いつして、キラが広まってこべ。

同時にラクスがある一歩を踏み出していた。

「君、可愛いね。テレビ出てみないかい？」

第三話 電子に舞う天使

ラクス・クラインは大きな歓声の中、ステージへと踊りでた。

ラクス・クライン

彼女がメディアに出始めて、まだ一週間。

しかし、すでに彼女は時の人である。

当然と言えば、当然である。歌に秀でたコーディネイターである彼女の歌に誰しもが感嘆を溢すのだから。

大通りで彼女の歌が流れれば、交通が麻痺し店に並べば完売。

彼女のデビューカ

『静かな夜に』

は、初登場オリコン一位を獲得した。

しかし、この曲、発売は後一週間も先になっていた。

テレビで彼女が歌うと問い合わせが殺到した。その勢いで発売は急がれたのだ。

それに加え、スタッフ、プロデューサーを驚かせたのは弱冠十歳にして書いたとは思えない歌詞を書いたのだ。（とは言つても中身は一国家をまとめていた様な賢人であり、完成された歌を書いただけだが）

彼女はすでに「アイドル」であった。

それに対し、キラは中々厄介な事に巻き込まれようとしていた。

ロイド・アスブルンドはチエックに出されたグラスゴーのコンソールパネルを覗き見ながら、眉根を寄せた。

その様子にセシルが気付く。

「どうしたんですか？ ロイドさん」

「うーん。このナイトメアだけ動かし難いって苦情が来てさー、今見てたんだけどね。変なんだよ、ここがね」

ロイドはそう言い、パネルの一ヶ所を指す。セシルもそこを覗き込む。ヒカルもロイド同様、眉根を寄せた。

「〇九ですね？」

セシルがそう訪ねたのも無理はない。〇九のスペックが違うのだ。

「誰だろね。この構成。ラクシャータじゃなさそうだし」

「それ以前に見たことがないですよ。〇九〇九のプログラム」

「だとしたらこれを使用した兵士の誰かってことだよね～？」

セシルはリストを出すと調べ始める。

「〇九の一週間の内に使用したのは……演習の時だけのようですね。でも、ロイドさん。演習生って数十人いるんですよ。それから絞るとしても、見付かるか、どうか……」

セシルが途方もないと言いたげにリストを下ろす。しかし、ロイドは薄気味悪く笑うとセシルに言つ。

「なら、彼じゃないかな？」

「彼？」

セシルはロイドが言つたことが分からず、聞き返した。

キラはラクスが出演するテレビを見ていると、教官が渋い顔をしてキラを呼んだ。

「……すまないキラ君。今から特別派遣嚮導技術部に行つてくれないか？」

「え？ 技術部ですか？ なぜ、僕が…」

「キラ君、私を助けると思つて頼まれてくれないか！？ 頼む！」

キラはそう言わると断ることができず了解した。

キラが嚮導技術部に入ると派手なクラッカーの音が鼓膜を叩いた。セシルはイタズラをしたロイドを叱咤するが特に効いた様子もなくキラを見る。
まんべんなく

困り顔をしたキラにセシルは安心をせようと自己紹介をする。

「私はセシル・クルーリー。で、」ちがいが…」

「ロイド・アスブルンド。ヨロシクね、ヤマト一等兵」

「えつと……なぜ僕はここへ呼ばれたんでしょうか?」

キラはようつ困惑した様子で一人を見るとロイドはまったく空氣を読まないでキラの背を押し、ナイトメアのコックピット型の椅子に座らせると横にあるスイッチを押す。

すると椅子はコックピットの中に吸い込まれ起動し始める。

ロイドは確認すると反対側のコントロールパネルに色々と打ち込み始める。ロイドの早技に置いていかれていたセシルもキラも現状に気付き驚きをあらわにする。

「ちょ…ちょっとロイドさん!」

「いや~彼のデータ取つときたくて」

「しかし、それでもこれは……」

「キラ一等兵?」

セシルを無視しロイドは何がなんだか、わからないキラヒロのプログラムの概要を説明する。簡潔に。

「君の右に説明書が挟まってるからそれ見て」

『あ、はい。ありました。…グラスゴーとは違つんですね』

「それじゃあ『一』

『え、ちょっと……』

キラの叫びも虚じへ、ロイド製のシリコーレーションプログラムが始動した。

十段階レベルの七

画面に seven の文字が現れ、秒読みが開始される。わけがわからぬキラは一応操作を確認する。

(やつぱりグラス『一』とは操作が違つ)

画面に〇の文字が浮かぶと目の前に突然、グラスゴーの十機ほどの軍団が現れ、開始と同時に初期装備のマシンガンを一斉に乱射する。

グラスゴーならば避けることが不可能な弾丸の雨。しかし、シリコーレーションの使用機は凄まじいスペックを発揮した。

キラの超人的操作にプログラムがついてくる。第一波の銃弾の雨を軽々と避けたキラは、まるで長年を共に過ごしたフリーダムと駆けているような感覚を感じ、操作にキレを産み出していく。

(これなら一)

3、3、4と横に並んだ機体にキラは素早く左から回り込む、市街地の設定であったのが、こうをそうしキラは縦一列に並んだグラスゴーにスラッシュショルダーケンを一つ飛ばし、一気に六機を戦闘不能

に陥らせ、残り四機に肉薄する。キラは機体に付いていた剣（後に知ることとなるMVSである）を抜くと機体のスペックにものを言わせた恐るべきスピードで四機の間を駆け抜け、目にも止まらぬ早技で四機のメインカメラと足を破壊し、戦闘不能にする。

（機体がついてくる）

画面にe.i gantの文字が浮かぶ。

コントロールパネルの前でセシルは驚愕していた。

（初めてのはずなのにレベル sevenをたつたの一十秒）

ロイドは興味深げにキラが操るロイドの目標機の姿を見る。

（予想以上だね～。シユナイゼル閣下に聞いた時はあんまり関心なかつたけど、持つべきものは第一皇子様だね）

そんなことを考えている一人の後ろでドア開き、気だるそうに一人の女性が入ってくる。

ラクシャータ・チャウラーである。

すぐにラクシャータはセシルとロイドに気付き、そして彼女たちが見ているパネルに視線を移す。

さすがのラクシャータも驚愕の表情を浮かべる。

シノコレーショングラムの画面にて、`line`の文字が光っていた。

皇帝直属のナイトオーブラウンズでさえ、`line`は手一杯であると言つにそれを…

画面の中でキラが操る機体は全包围から放たれる銃撃を鮮やかに、かわしながら次々にグラスゴーを倒していく。

三十体ほど、キラが倒すとグラスゴーが消えていく。

続けて `ten` の文字が浮かんだ。

ラクシャータとセシルがロイドに驚愕の表情を向ける。

当たり前である前人未到のレベル `ten`、それすら行けたものは口の一度もない。

しかし、ラクシャータは笑い、コントロールパネルの前まできた。

「誰なんだい？あれに乗ってんのは」

「キラ・ヤマト一等兵」

「ああ、天才君」

「え、知つてたんですか？」

ラクシャータが知っていたことに驚くセシルにラクシャータは笑つて答える。

「噂でちょっとだけよ」

ラクシャータは再度画面にまた目を向ける。

キラは自分と戦っていた。

今までのキラの動き、癖、反応速度。全てを解析し、できたログラムとキラは戦っている。

故に、キラが行動する瞬間一手先に敵は攻撃し、先手を潰し、反撃も潰す。

自分以上の敵との戦いの為のステージなのである。

キラが放ったスラッシュユハーケンをかわした漆黒の機体は中ばかり剣でハーケンのワイヤーを切断する。キラはすぐさまマシンガンを放ち、剣を持たない左腕を狙うが読んでいたのか、右の廃ビル群に消える。

キラも漆黒の機体を追つて走り、一つの同型機が向かい合つよう止まる。漆黒の機体はキラに斬りかかり、キラも剣を抜き放ち、二つの剣がぶつかり合つ。

「くつ！（距離を取ればスラッシュユハーケンを失った僕が不利。なら、近距離で…）」

キラは敵の剣を弾くと回りこみ死角から剣を振り抜く。普通の相手なら確実にメインカメラを失つていただろう。

しかし、敵は頭を僅かに下げるだけでそれを避け振り向き様にコツクピットを狙う。

キラの動体視力はその軌道を見きつているが操作が間に合わない。

（ぐ、ここだ…）

キラの思考で何かが弾けた……

「！」
「これは！」

驚愕したセシルとラクシャータの隣でロイドは嬉しそうに笑っていた。

画面に映されたclearの文字が踊った。

、

第四話 魔神 騎士 天使

キラは冴えた感覚が元に戻るとともに、視界に心配そうに覗き込むセシルが映る。

シリコーレーションプログラムは終わっていたようで、ロイドと褐色の女性が念入りにコンピュータに何かを打ち込んでいるのを見付ける。

ロイドと褐色の女性、ラクシャータが協同して物事を行うことは非常に稀であることをセシルしか知らない。

一段落したらしく、ロイドが近づいてくる。
「いや~「ゴクロウサマ~。興味深かったよ
「ロイドさん~!まずは謝つて下さい!」

「いえ、いいんですよ

「めんなさいね。と申し訳なさそうなセシルにキラはいえいえ、と笑顔で返した。

反省の色が無いロイドは相変わらずの満面の笑みで笑う、と紙の束

をキラへ渡す。

「はー、これにサインな

「何ですか?」
「これ

キラは渡された紙の束に首を傾げ、ロードの正面を見た。

「うわのトガアイサー申請書」

「トガアイサー?」

「ナイトメアフレーム(STM)の専属搭乗者と云つべきかもしけ
ないわね」

「それを僕が?」

聞も返すキラにロードは茫然と云つてひく顎を返した。

「もひーさん

ラクス・クラインは三週間ぶりにキラの所へ帰ってきたのだが、ドップリと寝入っているキラにラクスは驚いた。キラが寝入っているベットに近づいたラクスはやわらかく微笑み、キラの隣に座り……

「きつと幸ある未来を一緒に……」

ラクスは握ったキラの手を胸に抱き、キラの隣に眠った。

翌日、キラは赤くなつて慌てふためくことになるのはラクスしか知らない。

キラはデヴァイサーとして、ラクスはアイドルとして一ヶ月が早くも過ぎようとしていた時、昨今からの噂通り日本とブリタニアの関係は戦争状態へと移行した。

理由は主に戦略物質である。低エネルギー高出力を実現し、多くの機器に必要不可欠となつたサクラダイトの大多数を産出、支配している日本との経済制裁解除交渉が決裂したことが決定打となつたようだ。

もちろん、キラも出撃命令を受け、日本にいた。

シユナイゼル直属の特別派遣嚮導技術部は、重要拠点、栃木ゲンブ

の実家へと侵攻した。

しかし、キラたちが出撃するより先に一ヶ月という短い期間で戦争は終了、ブリタニアは勝利した。
KMFの出番がないと聞いたロイドの顔は非常に不満そうだった。隣で固く拳を握り恐い笑顔をしたセシルがいるのが少し哀れであるが。

やる」とのないキラは残骸の転がる海岸線を歩いていた。

所々から臭う死臭にキラは顔を眉根を寄せた。

「僕はなんのためにこの世界にいるんだ？」

キラは自分の無力さを嘆ぐ。

トボトボと歩くキラの田に茶髪で胴着に紺の袴をはいた少年と黒髪でブリタニア特有の顔立ちをした少年が入った。いや、彼らだけでなく少し離れて波に当たらないように車椅子のブロンズ髪の少女がいた。

遠田にも彼らの幼さがわかる、十代ほどだ。
彼らは悲しげに別れを告げているようだった。

「俺とナナリーは名を捨て、アッシュフォード家の庇護を受ける。
それでは……もし、お前がよければ……」

黒髪の少年が言わんとすることがわかったのか、茶髪の少年は首を横に振った。

黒髪の少年は残念そうに視線を落とした。

茶髪の少年は黒髪の少年にそんな悲しみを吹き飛ばすように無邪気に笑い

「ルルーシュ、釣りの約束忘れるなよ」

黒髪の少年も茶髪の少年が言わんとすることがわかり、笑顔が溢れた。後ろの少女も笑みを作った。

そこで初めてキラは彼女が眞田であることがわかった。常に閉じられた瞳がそう主張している。

この時、キラは運命に導かれたのだろうか。

彼らとの出会いがキラにとって世界に、大きな衝撃を与えるのだから。

黒髪の少年、ルルーシュが帰ろうと踵を返した時、視界にいてはならない存在がいた。背は小さいが軍服に身を包んだ男がこちらを見ている。

一瞬で考えをめぐらせたルルーシュは親友たる茶髪の少年、枢木スザクに鋭く声を発する。

「つーースザク！」

鋭い声にスザクもキラの存在に気がつく。

ルルーシュはよく分からずにオロオロしているブロンド髪の少女、ナナリーの車椅子を押し、逃げようとしたが砂場に足を取られ、中々前に進まない。

スザクはルルーシュがそつとしている間にキラとの距離を縮め、蹴りを放つた。

キラはスザクの蹴りに合わせていなし、そのまま足下を刈り、砂場に叩きつけた。すぐさま取り抑えられたスザクは悔しげに悪態を着いた。キラは無意識に少年を組みしいたことに罪悪感を覚えつつ、なぜ突然襲いかかったのか、聞こうとスザクを押さえ付けたまま、ルルーシュに叫んだ。

「どうして逃げるんですか！？」

「…………」

沈黙を守るルルーシュにキラはどうすれば、いいのか分からなくなつた。

、

第五話 天騎士始動

硬直状態を破つたのは低い男の声だった。

「どうかなさりましたか！？」

ルルーシュの声を聞き付けた黒服の男がとび出して来たのだがキラと睨み合つた瞬間、キラと黒服の殺氣は消えた。

むしろ、困惑が広がつた。何故なら二人は初対面ではないからだ。

「何故貴方が？」

「何故キラ君が？」

黒服の男はブリタニア本土でアッシュフォード家の警護にあたつていた。その当時、ある理由でラクスとキラはアッシュフォード家に

訪れ、その時に知り合つたのだ。

黒服の男は今は日本へ来たアッシュ・フォード家に遣えている。

ルルーシュに保護の申し出に訪れたのもこの男であった。

キラは男にルルーシュとナナリーの経緯を聞き、疑問が解決された。

皇族であるルルーシュとナナリーは今では暗殺の対象とされている可能性があるのでそうだ。

故にキラに、いや、正確には軍服を着た人間に過剰に反応したのだ

る。

男が願うまでもなく、キラはこの事を胸に秘めることにした。

改めてキラは彼らを見た。

茶髪の少年、枢木スザク

黒髪の少年、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア

ブロンド髪の少女、ナナリー・ヴィ・ブリタニア

まだ幼い彼らにはそれぞれ苦難がかかっている。

一人は父が死に明日が見えず

二人は命が狙われ、明日が見えず

彼らに何かをしたいが出来ることがない無力な自分に、またもはがみした。

黒服の男になだめられたルルーシュであつたが納得がいかない様子でキラを睨み続けている。どうすることも出来ないキラは悲しくなつた。

黒服の男に促され消えていく彼らの後ろ姿をキラは見送るしかなかつた。

軍に戻ったキラはブリタニアに戻り、思いを叶える力を求め続けた。そう何かに急き立てられるように、幾多の出会いがありながら、力を求めた。

ブリタニアの先駆けに出会い、ラクスの紹介でユーフェミア皇女殿下（その呼び方は止めて、と言われた）に出会い、平和を望む幾多の人々、同志と出会い、それでも足りない力を求めた。

そして……

ロイドは造り上げられていくＫＭＦを見上げながら、隣でコンソールパネルにデータを打ち込むセシルに溜め息混じりに声を漏らした。

「これでキラ君はウチのアドヴァイサーじゃなくなっちゃうね～」

「ロイドさん、部下の昇進を喜ぶのも上司の勤めです」

とセシルにたしなめられたロイドだがニッコニコ笑ってセシルに聞き返す。

「ボクが理想的な上司に見える?」

セシルはあらためてＫＭＦバカである伯爵に溜め息をついたが、自分も感じる寂しさを否定することは出来なかつた。

そして、翌日にはあの少年はナイトオブライアンズとなる。

入隊一年の快挙であつた。

正装を整えたキラは緊張した面持ちで鏡とにらめっこをし、顔の筋肉をやわらげ、右手にある携帯電話のラクスからのメールを見て、微笑むと気合いを入れ振り返り……コーネリアとブリタニアの先駆けこと、ギルフォード更にコーフンニアが立っていた。

「早いものだな、ヤマト」

「我々と出会い一年でよくナイトオブラウンズまで……いや、君だからだろ？」「

コーネリアとギルフォードがキラに祝辞を送り。コーフンニアからは礼式用の剣を受けとる。

礼剣を腰に携え、先に会場へ向かったコーネリアたちの後を追った。

音もなく静かな中、キラは一步ずつ真っ赤に続くカーペットを歩いていく。

横には貴族や軍部が連なつてある。

はいつめた空気の中、キラが中ほどまで歩みを進めた時……

金髪の少年の笑みが溢れた。

兵士の銃口が一斉にキラに向いた。

キラの体は凄まじい反応速度で動いた。

銃口が輝いた瞬間には銃弾をかいぐぐつた。

しかし弾丸は両側の兵士たちを相撲ちに追いやった。

キラは呆然とし、周りの惨状をまのあたりにする。

すぐに悲鳴があがつた。開場はパニック状態に陥り、「コーネリアたちが先導しているが、まるで効果がない。

その中で更にキラを狙つ影がいくつもあった。

キラはそれにいち早く気付くと開場から飛び出した。

キラは混乱していた。

何が起こってるんだ！？僕を狙つて何かが……

思考を遮るように銃声が響く。直ぐ様、キラは逃げた。

通りすぎた兵士は全てがキラに銃を向けた。

街に逃げ込んだキラは街の路地裏に身を潜め、兵士をやり過ごした。なんとかやり過ごしたキラは安堵の溜め息を溢し、路地裏から表の兵士たちを見る。

「どうしてこんな……」

「ボクが教えてあげようか？」

突然、背後から声が聞こえ、キラは驚いて振り返るとそこには金髪の少年が立っていた。

金髪の少年は微かな笑顔を向ける。

「君を殺そうとしてるんだ。君を殺すために素晴らしい舞台を用意したつもりだつたんだけど……残念ながら逃げられたから、ここで始末させてもらうよ」

銃を出し、キラに狙いを定める。

「君は……？」

「ボクは∨・∨。もよおなら変革者キラ・ヤマト、すぐにラクス・クラインも君と同じところに行くことになる」

ラクスの名を聞いた瞬間、キラの中で何かが弾けた。∨・∨の銃弾を縦横無尽に駆け抜けながら避け、基地に戻る。

キラの頭の中にはラクスを助けることしかなかつた。

兵士たちの銃弾をかいくぐつたキラは開発局のガレージに入り、開発途中のキラ専用機に乗り込んだ。

第七世代KMF - PTZ - 00ナイトファルト
プロトタイプ

グラスゴーなどと違いより人に近いフォルムと高出力のコグドラシリードライブを兼ね備えた新世代と呼ぶべき機体となっている。しかし、残念なことに武装と言える武装は両腕に着いたスラッシュハーケン、左右の腰に着いたMVS（試作）、そして左手に内蔵されたレールガンのみである。

それでもキラは機体のプログラムを立ち上げ、チェックしていく。尋常ならざるスピードでキー ボードが叩かれ、発進準備が整う。

ファクトスファイアを開き、敵の位置を補足し、ラクスがいるだらつテレビ局までの最短ルートを探る。

プログラムをインストールし終えたナイトファルトの始動キーを打ち込む。

ナイトファルトは命が吹き込まれたように目がエメラルドグリーンに輝く。

ナイトファルトは右腕を前下に左手を後ろ上に広げ、重心を前にとり肩幅より広くとった足幅で脚部のランドスピナーを展開し、地面に接地。

それと同時に最短ルートの索道終了。キラはフットペダルを力強く踏み、ランドスピナーを高速回転させた。

半分も完成していない兄弟機のランスロットの横でランドスピナーから火花を発生させながらナイトファルトは急発進した。ナイトファルトとランスロットは非常に似通っているがナイトファルトは機動性を重視してあるためにランスロットよりも鋭角的にできており抵抗を少なくてある反面、動きすぎることによる動かし辛さがある。まあ、キラは克服しているので関係はないが。

ガレージの扉を左手の小型レールガンを三発撃ち込むことで破壊し、

外へと飛び出した。

アラートが鳴ったがキラは気にせず、田の前に広がった景色を駆け抜けた。

今はただ彼の信じる愛を持つて

視界に出現してくる新型のザザーランドビグロースターを睨みつけ、
キラは大切なものを守るために力を振ることを躊躇わないことを
誓つた。

世界平和への旅が今、始まろうとしていた。

第五話 天騎士始動（後書き）

一週間に一回のペースで一杯一杯です。すいません。ですが頑張ります。とは言いますが実はこの話、3パターン考えたんですが、一つ目がブリタニアの騎士としてルルーシュに立ち塞がり：って話、二つ目がブリタニアから出ていき中華連邦に行き、そこでカレンと出会い（カレンは一時期中華連邦にいました）日本の現状を聞き手伝い。黒の騎士団に入る：って話と、今、執筆しているこれです。これは結構、本編とは違う道に行ったりするかもしれません。それでも見てくださる方には感謝です！ではどうぞ！

第六話 想い旅立つ（前書き）

種キャラのつぶやき ア「アスランと」 力「カガリの」 共「種
キャラのつぶやき」「一ナ」 ア「（俺、何やつてるんだろう）力
ガリ」 力「何だ、アスラン？」 ア「この「一ナ」必要か？」
力「暇だろ？ お前」 ア「俺は確かにアレックスとしての仕事も
無いが、お前は暇じゃないだろ？（確か、今日はテレビでドレス姿
のお披露目だつたはずだ）」 力「……息抜きは必要だ」 ア「ど
うして目をそらすんだ？また、マーナさんやキサカ大佐を困らせて
るんじや……」 力「マーナには休養をやつたし、キサカは出張だ」
ア「そういう問題じゃない！」

第六話 想い旅立つ

白に映える青と赤のラインが高速でグロースターとザザーランドの傍らを通り抜けた。

ナイトファルトが過ぎ去つていいくと駆動系が火花を放ち、ザザーランドとグロースターが四散した。

ナイトファルトは右手にMVSを持ち、次々と敵機を斬り倒していく。

驚嘆すべきは全ての機体をコックピットに傷をつけることなく破壊していることだろう。

囮まれるよりも先に敵の陣型を崩し、一気に一直線状の敵を粉碎する。

ただラクスのもとへ。

ただそれだけを思い、キラは鬼神となつた。

テレビ局で銃声がなり響く。

襲いかかる銃弾に悲鳴は無かつた。

ラクスは声をこじりし、非常口を指す。

テレビ局内は、これといって騒ぎとなつていなかつた。収録中だつた、と言ひ理由と目撃者は消されたからであつた。

ラクスは近付いてくる足音に隠れるように近くのドアに入った。

ドアの隙間からラクスは近付く影を覗いた。

茶髪の小さな少年が不釣り合いな拳銃を握つていた。

そこに反対側の通路から運悪く警備員が近付いてくる。

ラクスは近付く警備員に叫ぶ。

「来てはいけません！」

警備員が驚いた表情を作つた、その瞬間ラクスの視界に赤い波動が通り抜け

警備員は驚愕の表情で固まつていた。

「こ、これは……一体」

ラクスが振り返ると少年の幼げな顔と

不気味に赤々と輝く瞳
がラクスを射抜いていた。

少年はラクスではなく、警備員へ銃を向け、躊躇することなく撃つた。額から血を流して倒れる警備員。

「▽・▽・が言つた通り力が効かない。危険だ、貴方は」

少年の瞳はもとの色に戻り、変わらずの無表情で銃を向ける。少年の指がトリガーを弾く前に突然、地震が起つた。

凄まじい衝撃が少年とラクスを転倒させる。

ラクスは外を見ると巨人が窓から手を建物内へと突き刺している。優しく握られた手にラクスがおさまると手を引き抜き、走り去つていく。

少年は憎々しげに何発か銃を撃つたがKMFには意味をなさず、すぐ射撃止めた。

キラは後ろのコックピットハッチを開き、ラクスを招きいれる。

キラはラクスを抱き締め、ラクスはキラを抱き締め返した。

「よかつた。ラクス、君を失うかと思ったら僕は……」

「キラ……」

キラとラクスが涙を流し、お互いの顔を見る。ラクスは安心した表情から真剣な表情へと変わり、キラも真剣な表情を浮かべる。

「キラ、スピカへ連絡を。計画を早めます」

「うん」

キラはラクスに携帯電話を渡し、ナイトファルトで近くの建物に入り、電源を落とし、ファクトスファイアの索道を逃れる。

ラクスはラクスとキラの携帯電話のみにつけられたボタンを押す。数回、呼び出し音が流れたのち繋がった。

ラクスが経緯を話すとすぐに携帯電話を閉じた。

ブリタニア軍イルゲイム管轄区、旧イルゲイム軍用庫に着いたラクスとキラは用意されていた大型トレーラーに機体をのせ、個人チャーター機がある飛行場へ向かった。

その頃丁度、ロイドが試作機が消えた格納庫で奇妙に曲がった笑顔

を浮かべていた後、昏倒したとか、いなかつたとか。

風でラクスはピンクの髪をなびかせながら、キラとチャーター機へ乗り込む。

ラクスは悲しそうに遠ざかるブリタニア本土に目をやりながら漏らす。

「コフィイさんやノーネリアさんたちへお別れも言つてしません。残念ですわ」

「……わっと」

ラクスは希望に満ちたキラの顔を見た。

「僕たちが信じる世界を求め続けねば、また会える。どんなに離れていてもどれだけの時が経とうと……わっと」

「わつですね」

キラもラクスも今ある未来への可能性に笑った。

、

第七話 緑（前書き）

短いです

第七話 緑

中華連邦広東地区

トラックの中から青空が広がっている空を見てくるラクスの隣でキラはパソコンにデータを打ち込んでいる。

画面にはKMFが表示され、細部に装備の原理や用途が書かれてある。隅にfreedomやdragonsystemの名があった。

キラが打ち込んでいるとラクスが何かに気付いたように運転手に声をかけるとトラックが停止した。

止まつたトラックにキラは何かあったのかとトラックを降りていったラクスを後を追つた。

キラが降るとラクスが緑髪の少女と話していた。緑髪の少女はラクスに驚いた様子でラクスのペースにのせられ、いつの間にか、トラックに乗つっていた。

キラが緑髪の少女に近付くとラクスが言つ。

「じ・じさんとおひなですわ。近くの町まで連れていってほしいそうです」

「じ・じと聞いた瞬間、▽▽といつていた少年を思い出したが、考えすぎだと頭を振つた。が名前の特異性が気になり聞いた。

「C・Cなんて珍しい名前だね」

緑髪の少女はとくに気を悪くした様子もなく言つ。

「偽名だからな」

.....

.....

.....

「.....え？」

あつさりといわれてしまつたキラは固まつてしまつた。

しかし、緑髪の少女はラクスと雑談を初め、結局、話は聞けなかつた。

何やら意氣投合した一人（C・Cがラクスを気に入つたようで先程まで一人で一緒にベットで寝ていた。ラクスの性格と雰囲気のたまものであろう）は次の町についても仲良く、電気充電中のトラックを置いて、変装しショッピングに出かけた。

一人の護衛には運転手が着いて行き、キラは残り、パソコンにてタを打ち込む作業に没頭した。

日が高く上った頃には、トラックはまた町を出て、次の町へ走った。結局、緑髪の少女は上海行政区を通りすぎ、日本（現在はブリタニアの植民地エリアー）まで着いてきた。

本当になつかれたラクスも友人ができたことに喜びながら、ここまで着いてきたこの心配をしていた。

こんなところまで連れてきてしまって良かったのだろうか？　ヒ。

しかし、それは全くの杞憂であった。

「何だ？そんな神妙な顔をして。腹でも下したのか？」

何故だかこのラクスになつくと同時にキラで遊ぶことが多くなつていた。

「いや、そういうわけじゃなくて、ただ聞きたいことが……。」

「まあ、何が言いたいかは、だいたい見当がつく

最初からうしてくれば良かつたのに、とキラは思つたが口に出さなかつた。

「中華連邦には知り合いを訪ねていたんだ。いなかつたんだがな」

「…………」

初めてC・Cが寂しそうに笑うのを見たキラは慌て、何も言えなくなつた。

「どのみち、ここへは戻つてくる予定だつたからな」

「…………」

キラは何も言わなかつた。

C・Cと別れたラクスはNACと呼ばれているサクラダイト管理機関を訪れた。もっとも裏ではキョウトと言つ名の知れたテロリスト支援機関でもある。

キラは別にアッシュフォード学園を訪れた。用件は協力体制の確認である。

この一年間水面下で

『人が人らしく生きることができる世界を創る』ことを理念とし、ブリタニア穩健派を取り込み、協力体制を確立させつづつあつた。けつして数は多くはないがラクスもキラもこれは妥当であると分かつていた。このパイプ役をかつて出たのがアッシュフォード家であった。

一年前にあつた少年たちについて聞こうとしたが聞くべきではない

とかぶりを振った。

あと一つわかったことはキラは現在、ラクス・クライン誘拐の罪で捜索されていることだ。キラが命を狙われたことは揉み消されたようだ。

再会とはえとしてあつさつとしたものだ。

いや、相手は前から聞いていたのかもしれない。げんに驚いた表情もしなかつたのだから。

楽しそうに（ロイドの機体をいじくり回すことが出来て嬉しいのだ）ナイトファルトを分析します。

ラクシィータ・チャウラーとの再会は非常に味気無いものだった。

、

第八話 想い、相対的に（前書き）

一期には少ししか触れないかもしません。コーエミアによるかも。コーエミアを生かすか、それとも原作通り殺すか、そこが別れ道ですね。意見があればお願いします

第八話 想い、相対的に

機体をインドへ送った後もキラとラクスはキョウウトの保護を受けていた。

テロ活動は年々の激化の一途を辿った。

一、一年の間に中華連邦、EU、ブリタニアに協力者を探し、協力を申請するなど活動したが世界はブリタニアの支配の恐怖、利己の欲望によって硬く凝固し、世界は変革を求めることがえまならないほどに歪んでいった。

逆にブリタニアに支配された事によって、その国が安定し、貧困が緩和された例がある。

しかし、少なくともAREA11……いや、二ホンはその中に含まれない国であった。

『日本開放戦線退却しました。いかがなさりますか?』

「相手への損害は……まあまあか、まあいい退却通路へ案内しておけ」

『はつ一』

画面から報告兵が消えると老人が後ろにいたキラとラクスへ向き直った。

「そう悲しそうな顔をなさるな」

ラクスの顔が悲しみで歪んでいることに気付いた老人は慌てるでもなく穏やかになだめた。

「田を背けることはしません。わたくしは今ある現実を受け止めたいだけなのです」

「それがラクス殿が願う世界と反対のものであるからかね?」

悲しみの表情はない、あるのは年にみあわぬ貰禄。

「はい」

老人は笑った。瞳の奥に渦巻く、その人間の闇をキラとラクスは逃すことも無かつた。

皇歴2017年

その年、日本に反逆者が舞い降りた。

名は

ゼロ

彼は瞬く間に大半の日本人へ希望を与えた。

しかし、言い換えるならばゼロはよりいつそう日本人へブリタニアを憎む心を深く植え付けた。

キラとラクスは当然のように肩身が狭いままで過ごしていた。

表向き保護だが、隔離に等しかつた。

彼らに打ち解けることが出来たのはラクシャータと神楽耶であった。

そんな中、ゼロが作つた黒の騎士団はブリタニア軍へ多大な戦果をあげていた。

最新鋭の純日本製KMF、紅蓮一式も黒の騎士団へ実戦配備され、ラクシャータも彼らの所へ派遣されていた。

季節が秋を示す肌寒さと共に、ある知らせが舞い込んだ。

「キラ様には、ゼロ様に協力していただきたいのです」

「……それは先日の日本宣言を行つたあの……」

「はい。しかし、これはそれだけではないのです。ブリタニアと日本との溝は拡がるばかり、あなたがたを疑う輩も少なくはありません。ですからこの事項へはキラ様の力を貸し頂ければ、そのような輩

を沈める」ことができるのです

キラはやはりか、と言ひ風に顔をしかめ、ラクスはキラを気遣わしげにみた後、神楽耶に向き直り、キラと同じ結論に行き着いた。

「わかりました」

九州は激しい雨と風が吹き、まるでこれから激戦への狼煙のよつである。

「機関出力最大。ブースターへエネルギー供給終了。神威発信準備完了」

神威とは素体のナイトファルトからラクシヤータが造り上げた新型である。

しかし、ゼロのガウヨインのようなフロートコニッシュはない。

だが、それでは退却は困難であるが故にラクスが秘密裏にラクシャー¹に情報を提供し、造り上げたバー²ニアスラスターを装備している。もちろん、試作型である。エネルギーはまかないきれないため退却用のバッテリーを取り付けた。

そのため、行きは潜水艦である。

ナイトファルトの形状が残つた神威は右腕に輻射波動機構が備え付けられている、とはいっても紅蓮一式の様に掌から展開するわけではなく（展開は可能）、掌を介して回転刃刀へと伝達し、切味を凄まじいものとするためだ。左腕には大型の槍の形状をしたスラッシュユハーケンが取り付けられ、掌には小口径電磁銃を握っている。姿も白銀に金の目立つ容姿であり、これには目立ちながらも強さを誇示できれば敵の士氣を低下させることが出来るためだ。

「ラクスの声が神威のモニター」こしに聞こえてくる。

「必ず……必ず帰つてきてください」

キラは悲しみの浮かんでいるだろうラクスの顔を思い浮かべ、交渉に尽力していた真剣なラクスの顔を思い浮かべ、優しい笑いかけるラクスを思い浮かべ、決意のまなざしで荒れ狂う海をにらみつけた。

「ラクス……必ず、戻つてくるから、絶対に」

今は、力がある

思
い
も
あ
る

だ
か
ら
、
ぼ
く
は

「キラ・ヤマト、神威行きます」

白銀と金が空を舞つた。

、

第九話 魔神と天使（前書き）

評価してくださった皆さんへの返事を書くのが遅くなり申し訳ありませんでした。マナーを守っていきます。指摘してくれた方、ありがとうございました！

第九話 魔神と天使

九州大分ブロックに降り立つた神威はここでゼロからの通信が入るまで待つことになっていた。

ほどなく通信が入った。

画面に現れたのは仮面の男、ゼロ

「時間通りだ……その前にキラ・ヤマト。お前は何のためにこの戦場へ立っている？」

ラクスに通じるある種の威厳とカリスマ性を感じながら、キラは画面をにらみつけた。

「世界に人が人として生きることができる世界を創るために」

ゼロは鼻を鳴らし、断言する。

「そんなものは傲慢でしかない。世界を見下ろし、まるで自らが神であるかの如く世界を創造すると言うお前、なんら暴力による世界の平定を目指すブリタニアと変わらない」

「違う。ぼくらが創る世界は人が選ぶことができる世界なんだ。人は強要されるから反発する。自らの在り方は自分で決められる、人々が手を取り合える世界へ僕は、僕たちはえていきたい」

次は切り捨てず、キラへ聞き返す。先程の刺々しさはもうなかつた。

「何故、世界をそれほどに安じる？いや、何故、ブリタニアを倒す

事を考えない。ブリタニアを倒すことで日本は解放される。それこそAREA11の、日本の悲願。キョウトに協力していれば、当然の考え方だ」

仮面の男、ゼロであるルルーシュは内心で呟く。

だが、それでは何も変わらない。ブリタニアが倒れたとしても戦略物質サクラダイトをめぐり、結果日本は他国に狙われた生活を送るだらう。世界が変わらなければ、日本は真には助からない

ルルーシュにもブリタニアを倒す重要性は低いことはわかつていていた。世界には分かりやすい悪が必要なのだ。人々を結束させる標^{しべ}が。ブリタニアはそれにうつてつけだ。しかし、そうわかつてはいても……

ルルーシュは自らの憎しみを押さえることはできなかつた。

キラはいい放つた。

「世界が変わらなければ、何も変わらない。だから、日本もブリタニアもE.Uも中華連邦もすべてが変われば世界はよい方へ進んでいくと僕は思つてゐる」

「君の考えはわかつた。では君は南から福岡ブロックを攻めてくれ私は北東から攻める」
指令を聞くと神威はすぐさま向かつていった。

内心でルルーシュはかつて出会つた事のあるキラに呟いた。

まったく、お人好しな奴だ

そう呟いたが、ルルーシュはブリタニアの軍人であったかつてのキラが密告することなく、更にルルーシュが気付かないところで援助もしていたことを近頃知ったルルーシュはキラが信頼に値すると理解していた。

仮面を外し、頬を緩めたルルーシュに下から声がかけられる。

「言った通り、ドガ付くほどのお人好しだつただろう」

「ああ、変わらない奴だ。出会った時もそうだった」

「ラクスの方がお人好しだがな」

ルルーシュの下の操縦席に座るC・Cからやわらかい、と言つか、ルルーシュが聞いたことがないほど優しい声が聞こえた。

ルルーシュに、むしづがはると同時にガウェインはよどんだ空へと溶けこんでいった。

、

第十話 過去の残像（前書き）

後書きをお読み下さい

第十話 過去の残像

雨粒が白銀のフォルムを叩き、パラパラと落ちる前に凄まじい速さをもつた神威は卵型のKMFを粉碎した。

ランスロットの中で枢木スザクは、ランスロットに酷似したナイトメアに困惑の表情を浮かべていた。

ナイトファルトを知らない彼ならば仕方のない驚愕である。

しかし、彼以上に驚愕した人物がいた。

ナイトファルトの生みの親、セシルとロイドである。

画面に映りこむ、ナイトメアのフォルムを見たセシルとロイドは田を見開いた。

KMFのカラーは違うものの、自らが設計したKMFを忘れるはずもない。

同時に彼らは脳裏に一人の少年を思い出していた。

8年前に消えた少年

そして

ラクス・クライン誘拐事件の容疑者

軍事兵器強奪の国家反逆罪

汚名の限りをつけられたキラの名

しかし、信じる者もいる

キラを信じる者の中にセシルとロイドはいるのである。

セシルは通信を開き、戸惑いの声をあげる少年へ澤崎敦の確保を急がせる。

そして、自らの考えを垂られまこといつひそかに通信を切った。

セシルのすぐ後ろまで歩み寄ったロイドはセシルにのみ聞こえる声でたしなめた。

「いらっしゃんでも不自然に思つよ。か・れ 」

「……わかつてこます」

「そ」

ロイドは沈んだセシルの前に四角の記憶媒体を置く、これはセシルが知ったものだつた。

8年前に造られ、5年前に破棄されたはずのそれをセシルは手を開き、握る。

表面上にはセシルの字で Return Program
とある。

少年の帰還を願つたプログラム。

「いや～棄てるのが惜くてね～」

と黙つロイドの声が聞こえていないかのようになコンピューターに記憶媒体を挿し込み、データを読み込んでいく。
セシルにはその時間すら惜しく感じてしまう。

読み込みが完了した時には、ナイトファルトの発展機は辺りの機体をほぼ壊滅させていた。

スザクからも確保完了の報告が入った。

あとはプログラムを起動させるだけ、それだけである。

働くかはわからない。しかし、起動する価値はある。

起動ボタンをゆっくりとしかし、しつかりと押した。

効果はすぐに現れた。

あらかた片付け、敗走していく卵型のKMF『ガン・ルウ』と戦闘員。

晴れ始めている空の雲に紛れて消えていく大型のKMF『ガウェイン』を確認したキラは自らのナイトメアを帰還しようと動かそうとした時、機体のモニターに『データ受信中』の文字が踊り、キラは困惑の表情を浮かべた。

すぐに『受信完了 始動』とモニターに映り……

「」「これは……！」

異変を感じたラクスの声がすぐに途絶えた。

「スザクくん、ポイント」 - 42Aに身元不明の機体があるの、そこへ向かつてその機体を捕縛して

『イエス・マイロード』

連絡を切ったセシルはモニターに空を見上げたまま動かなくなつたKMFを映した。

「よかつたね」

と囁ひの声も今は不快では無いとセシルは感じた。

あとはあの機体が容易に捕縛できるか、だけである。

スザクは通信で送られてきた索的ポイントへたどり着いた時に息を呑んだ。

空を見上げたまま動かないKMFの姿がそこにあった。

先程の躍動が嘘のような沈黙。

血の分身がいるかのような感覚に襲われる。

機体に近付くと、セシルの声でスザクは我にかえった。

「スザクくん、コックピットを開きます。確保をお願い」

「は、はい！」

セシルの声と同時にコックピットが開き、茶髪の少年が姿を現した。

スザクの過去の記憶が呼びおこされる。

アヴァロンでもセシルが息を呑んでいた。

紛れもなく、そこにはかつての少年。

キラ・ヤマトがいた。

、

第十話 過去の残像（後書き）

ここからは2つに分断したいと思います。1つはルルーシュ、スザクと最終的に和解し、進むシードストーリー、もう1つは大体のストーリーにそつて進むギアーストーリーです。どうぞよろしくお願ひします。「意見」感想もよろしく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8598e/>

SEED GEASS

2010年10月9日13時58分発行